

語った。

一行は最終日、青森県の  
恐山を参拝、地獄巡りの後、  
震災犠牲者のために極楽浜  
に建立された大地蔵尊を囲  
んで最後の大念珠繰りを行  
い、慰霊巡拝を終えた。

## 自身の終焉見つめ より良い人生を 「終活フェスタ」盛況

人生の最後は自分で決  
める時代といわれるようにな  
った今日、「終活」に関す  
るイベントが様々な場所  
で行われている。そうした中、  
医療、介護、遺産相続、葬  
儀など人生の終焉にまつわ

な形で「お渡しすれば、支  
援の幅を最大限にでき、寄  
付者の思いも伝えられるか  
ということ。お米なら  
ともかく、販売商品ともな  
れば金額に価値が寄ってし  
まい、なおかつ寄付者の想  
いは届きにくくなります。  
地震と津波によってライ  
フラインも物流も止まった  
あの時、この社会は何て脆  
弱なのかと感じた方も多か  
ったと思います。しかしそ  
れは、人の繋がりと感謝の  
気持ちの大切さを再認識し  
た瞬間でもありました。食

る問題を解決する専門家と  
の橋渡しを担うために発足  
した終活カウンセラー協会  
が8月24日、東京都港区に  
ある都立産業貿易センター  
で「終活フェスタ」を開催、  
約3200人が会場につめ  
かけた。

当日は葬祭業者38社が出  
展。遺影撮影や納棺体験な  
どのコーナーが設けられ、  
来場者は様々な体験から終  
活を理解し、人生の終焉を  
見つめる機会としていた。

午後の講演会では、浄土  
宗僧侶の戸松義晴師（東京  
・心光院住職）、中尾ミエ  
氏（歌手・女優）、武内優  
宏氏（弁護士）、武藤頼胡  
氏（同協会代表理事）らが、  
終活に関する意見を交わし  
た。

エンディングノートに記  
したことは遺言書とは異な  
り、法律上通用しないとい  
う話題が上がると、戸松師  
は「一番理想的なのは、遺

品を届けることは単純な物  
資支援に止まらず、人の繋  
がりと命を支えます。これ  
が出来るのは、それが食品  
本来の価値だからだと思  
います。

最近では、仙台市荒浜・浄  
土寺の中澤良宣副住職が代  
表を務める被災者相互支援  
団体「若松会」への食品提  
供も始まりました。感謝の  
気持ちをこれからも繋げて  
いきます。

NPO法人  
ふつとぽんく東北AGAIN事務局長

高橋陽佑



終活について意見を交わすパネ  
ラー（右から2人目が戸松師）

言書を書くのではなく、家  
族と話をし、皆に了承を得  
てもらうことです。常に信  
頼関係を築くことが大事」  
と、決して独り善がりでは

東日本  
大震災

### カフェで人々に笑顔を 寺庭婦人が福島を訪問

浄土宗寺院僧侶の夫人な  
どによって組織される浄土  
宗寺庭婦人会（加用稔子会  
長）の会員25名が9月3日、  
東日本大震災で大きな被害  
のあった福島県いわき市永  
崎地区の集会所を訪れ「寺  
庭婦人カフェ」を開いた。

同会は3年前に「心のケ  
ア支援プロジェクト」事業  
を立ち上げ、傾聴に関する  
研修会で研鑽を積み、寺庭  
婦人だからこそできるボラ  
ンティアとして被災地を訪  
問、地元住民と交流を続け  
ている。

午後1時半、近隣に住む  
参加者約30名が集会所に集  
まると、早速、色とりどりの  
花々をビニール製の花器  
に生ける「フラワーアレン  
ジメント」を行った。参加  
者から開始早々笑みがこぼ  
れ、会員と参加者が打ち解  
けあう様子が見られた。

その後、絵本の朗読や紙  
芝居を楽しみ、ティータイ

なく、家族が納得するよう  
な終末を一緒に考えること  
を参加者にアドバイスした。  
武内氏は「人間は人と人  
との間にいるからこそ人間  
です。今日をきっかけに家  
族や友人の縁を改めて大切  
にしてください」と締めく  
くった。

来年は、東京都大田区に  
ある産業プラザPiOで9  
月26日（土）、27日（日）  
の2日間開催する予定。

ムでは手作りのプレゼント  
が配られ、持ち寄った全国  
各地の銘菓を味わいながら  
和やかに談笑。カフェも終  
盤に差し掛かると「星影の  
ワルツ」など懐かしい曲を  
皆で歌い、最後は全員が輪  
になり手をつなぎあって  
「ふるさと」を大合唱、心  
を共にしていた。

1時間半という短い時間  
の交流だったが、参加者と  
会員が手を取りあいながら  
別れを惜しみ、涙を流す姿  
も見られるなど、充実の一  
日を過ごした。



和やかムードのなか花を生ける参加者